漢詩神奈川

第　36　号

神奈川県漢詩連盟
事務局

横浜市鶴見区岸谷
4-28-23-301

TEL-FAX
045-573-3045

発行人　香取和之
編集人　久川憲四郎

着実に「漢詩を学び 漢詩で遊ぶ」の実践を！

神奈川県漢詩連盟会長　香取 和之

香取和之会長

皆様、新年明けましておめでとうございます。お正月はいかがお過ごしでしたか。

新年を迎え、この一年はどう臨むのかを考える時に、いつも思い出す一節が論語にあります。それは、孔子の高弟の子路がある人から師はどういう人かを問われて答えられず、そのことを孔子に報告したところ、孔子は自分は以下のような人であると言ったのです。

「其の人と為りや、憤を発して食を忘れ、楽しみて以て憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみと。」

つまり、「自分は発奮して何かに集中していて食事も忘れ、自分の道を楽しんでは心配事も忘れ、やがて老いがやってくることにも気づかずにいる」（私訳）。我々は、まさしくこの様に「漢詩を学び　漢詩で遊ぶ」の道を歩みたいものです。

昨年は何と言っても「令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会」の開催が最大行事でした。十月二十六日に「はまぎんホール ヴィアマーレでの大会」と同夜の横浜中華街「菜香新館での交流懇親会」、そして翌日に「三溪園での吟行会」を盛況裏に終えることが出来ました。これらはひとえに神漢連の会員皆様の尽力です。厚く御礼申し上げます。

大会は概ね好評であり、特に会場は多数の聴講者でほぼ満席で、活気ある全日本漢詩大会であったとの声が多く寄せられました。また、主催者にとって嬉しかったのは、ＪＲ桜木町駅から会場への道の要所要所に会員が立っていて案内をするなど「おもてなしの心」で各県連の人々を温かく受け入れていると言われたことです。表彰関係では、特別賞が四名、秀作が一名、入選が四名と、多数の神漢連の仲間が受賞したことです。おめでとうございます。残念ながら入賞・入選されなかった方々も、腕を磨いてまた次回以降挑戦願います。

今年の神漢連の活動としては、例年通り四・五月に第十九期の「漢詩入門講座」を開き、新たな会員を迎え入れる予定です。また、各漢詩サークルでの作詩・批正、鑑賞会ＡＢＣ・霧笛女子会・大簡会・講演会での漢詩鑑賞、オンラインでの吟行、漢詩研修会、更に神辞会、自詠自書などが予定されています。

尚、今年は漢詩大会や記念行事もなく、着実に「漢詩を学ぶ　漢詩で遊ぶ」を実践できる年と思われます。

一部の会員は自主的に漢詩を更に学び、全国大会でも入賞・入選できるレベルに達していますが、一方では、「詩藻を深めること」、「正しく滑らかな構文で記すこと」、「説明・報告は不可」、「詩になるように」、等々課題は尽きません。今年は、これらの課題について、神漢連会員のレベルアップが一層図れる施策を検討し推進していきたいと思います。また、年老いても自分の趣味として漢詩を楽しみ続け、細々ながらも自分の思いを詩にしたいと思っておられる方々も多く、そのような立場も尊重していきたいと思っております。

令和6年度 全日本漢詩大会 神奈川大会

全日本漢詩大会神奈川大会が開催される！

大会は総三百五十名の参加で盛会

表彰式、特別賞作品吟詠、記念講演、構成吟の吟詠で盛りあがる

懇親会も八十五名参加で交流の実をあげた

吟行会は三溪園で四十七名が参加

以下、それぞれの部をみていこう！

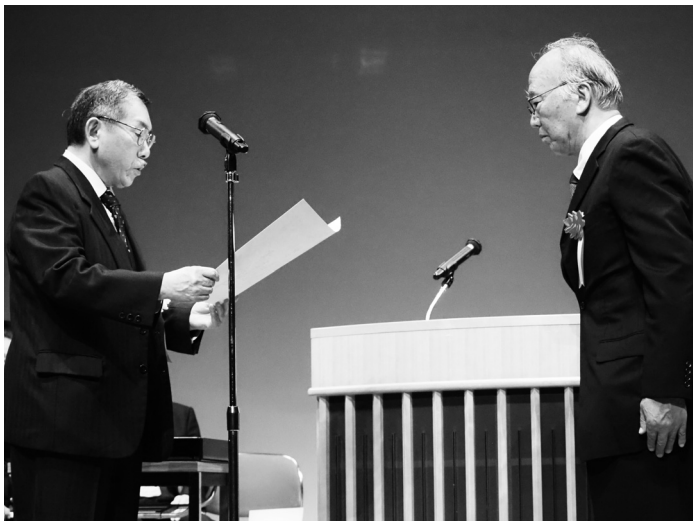
開会式の模様

第一・大会の部

（はまぎんホール　ヴィアマーレ）

大会は、「〝漢詩再興〟へ新たな息吹を」をテーマとして、全日本漢詩連盟、神奈川県漢詩連盟が主催して、十月二十六日（土）十三時から、横浜みなとみらい地区の「はまぎんホール　ヴィアマーレ」において開催、全国から漢詩愛好家、総三百五十名の参加を得て、会場はほぼ満員状態であった。

大会は、**開会式**から始まり、神奈川県漢詩連盟（以下、神漢連）水城まゆみ副会長の開会宣言、主催者代表の神漢連香取和之会長の挨拶、来賓の神奈川新聞社須藤浩之社長の来賓挨拶。



文部科学大臣賞の表彰

続いて、来賓の紹介、選者の紹介、大会役員の紹介が行われた後、表彰式に入る。

全応募作品、一般が二百九十二首、U（アンダー、以下同じ）23が五十二首、U18が六首の合計三百五十首の中から、厳正な審査の結果、次の作品に各賞が与えられた。

一般の部　特別賞十三首、秀作六首、入選十七首

U23奨励賞　最優秀賞一首、優秀賞二首、秀作五首、入選七首

U18奨励賞　最優秀賞一首

一般の部の特別賞十三首は、以下のとおり。

文部科学大臣賞
神奈川県知事賞
横浜市長賞
神奈川県教育委員会教育長賞
横浜市教育委員会賞
全日本漢詩連盟会長賞
神奈川県漢詩連盟会長賞
横浜華僑総会賞
横浜中華街発展会協同組合賞
産経新聞社賞
神奈川新聞社賞
ＮＨＫ横浜放送局長賞
ｔｖｋ賞

表彰式では、表彰状が、特別賞、U23奨励賞最優秀賞・優秀賞、U18奨励賞最優秀賞の各人に、秀作と入選については代表者に授与された。

満席の会場（表彰式）

受賞作品の選評は、審査委員長の全日本漢詩連盟会長の鷲野正明先生が、作品ごとに詳しく述べられた。受賞者を代表して、文部科学大臣賞の安井良隆氏が謝辞を述べた。また、次年度漢詩大会開催県として徳島漢詩連盟事務局長の田中公氏が挨拶し、次回大会の概要について説明した。

受賞作品の選評をする
鷲野正明会長

ここまでの司会は、神漢連の東島正樹事務局次長が行った。

休憩をはさんで、司会が神漢連の高橋純子執行理事に交代し、十四時四十分から二十分間、**特別賞受賞作品吟詠**が行われた。正面スクリーンに作品が映じられる中、

文部科学大臣賞の「金港雑詠」、続いて「柳津送別」「立夏野渡」「海上送別」「能登半島地震」「鞆浦」「浮浪」の七作品が、すべて神漢連の会員七名による吟詠で行われた。

尺八は、栗城笙童氏による。

特別賞受賞作品の作者と吟詠者（敬称略）

文部科学大臣賞　神奈川県　安井　良隆
金港雑詠　吟詠　横溝　藍鵬
神奈川県知事賞　神奈川県　白石　信隆
柳津送別　吟詠　家吉　精雄
横浜市長賞　東京都　恒松　景子
立夏野渡　吟詠　小菅　岳倖
全日本漢詩連盟会長賞　東京都　岡田　譲
海上送別　吟詠　村田　精流
神奈川県漢詩連盟会長賞　岡山県　中野　悟
能登半島地震　吟詠　青木　憲山
U23奨励賞最優秀賞　広島県　河野　沙穂
鞆浦　吟詠　松原　芦遊
U18奨励賞最優秀賞　埼玉県　前久保妃菜
浮浪　吟詠　鈴木　芦泉

文部科学大臣賞「金港雑詠」作者の安井良隆氏（右端）と吟詠する横溝藍鵬氏

特別賞受賞作品の吟詠が終わり、休憩の後、十五時十分より四十五分間にわたって、記念講演が行われた。

記念講演は、鷲野正明会長が**「蘇州の歴史と漢詩ー西施のいたころー」**と題して、春秋末期の呉越抗争、中国四大美人の一人といわれる西施（他の三人は時代順に王昭君、貂蟬、楊貴妃）にまつわる話、そして当時を懐古して詠う李白、陳羽、趙嘏、皮日休の詩を解説された。

（講演の概要と模様は、十面と十一面に掲載しているほか、神漢連のＨＰにYouTubeとしてアップされています）

大会の最後には、十六時から三十分間**構成吟「神奈川を詠うー漢詩と共に旅をしましょうー」**として、

漢詩八首、夏目漱石の「函山雑詠」で箱根から始まり、湘南、江の島、鎌倉、葉山、横浜という名所を詠った漢詩作品と印象的な風景映像をスクリーンで見ながら、会場いっぱいに響き渡る朗々とした吟詠で、皆でその現場にいて共に旅をしているような心地がしました。各作品の作者は、江戸・明治の詩人や全日本漢詩大会特別賞受賞の神漢連会員など八名、吟詠は岳精流日本吟院（通称、岳精会。本部は川崎市）の皆さんにより行われました。

構成吟「神奈川を詠う」と吟詠者（敬称略）

函山雑詠（五言律詩）	夏目漱石	
	吟詠	奥村　精曄
		丹羽　龍風
		上杉　龍景
湘南海岸見箱根駅伝与滑瀾（七言絶句）	岡崎満義	
	吟詠	前嶋　龍彩
		大井　龍静
酒匂川畔村酒（七言絶句）	城田六郎	
	吟詠	園田　精鵬
		池田　精嶽
絵島（七言絶句）	菅茶山	
	吟詠	大森　精翠
		越智　精麗
頼朝故宮（七言絶句）	太宰春台	
	吟詠	坂井　精鸞
		小林　精晄
鶴陵廟偶成（七言絶句）	秋吉邦雄	
	吟詠	駿河　精桜
		松井　龍寶
葉山海岸望岳（七言絶句）	鈴木豹軒	
	吟詠	佐藤　精堂
		野中　精隆
横浜（七言絶句）	嵩古香	
	吟詠	横山　龍精

構成吟「神奈川を詠う」

十六時三十分、時間どおりに閉会宣言が、神漢連新井治仁副会長により行われた。こうして大会は盛会のうちに幕を下ろしたが、参加者が三百五十名と予想をはるかに上回る人数であり、会場がほぼ満席であったことと共に、内容の充実ぶりから概ね好評であり、活気ある全日本漢詩大会であったとの声が多く寄せられた。

また、会場までの経路を神漢連会員の皆さんが、ＪＲ桜木町駅から会場までに立って案内したことなどについては、他県から参加の方から、有難かったと、その「おもてなしの心」に対して感謝の意が表された。

第二．交流懇親会の部（菜香新館）

夜の部、交流懇親会は、横浜中華街の広東名菜「菜香新館」で八十五名が参加して行われた。香取和之神漢連会長の挨拶の後、内田誠一全漢詩連副会長の乾杯の音頭で始まった。

「食在広州（食は広州に在り）」と言われるとおり北京、四川、上海など数ある中国料理のなかで、最も日本人が好む料理と言われる広東料理のフルコースで名菜を堪能するとともに、参加者相互の懇談が始まり、最初は各テーブルで、次にテーブルを越えてあちらこちらで対話が行われ、懇親・交流の実を上げた。

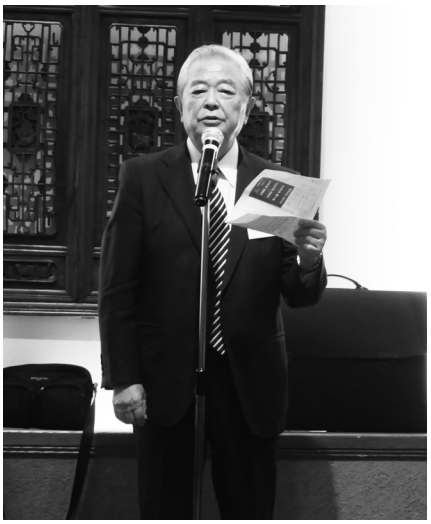
内田副会長の乾杯

司会者の指名により、スピーチが始まったが、特別賞受賞者数名の喜びの声と作詩の苦心談などや、遠方からの来場者の漢詩創作や所属する会の活動の様子など、特に高校で漢詩を生徒に教えている先生からは最近の熱心な活動の報告があるなど、次々にスピーチが行われた。

神漢連会員のスピーチは、神奈川県知事賞受賞の白石信隆氏、当日参加者全員に配った「漢詩のなぞなぞ　増補第二版」（十三面記載）の作者である山口幸雄氏、神漢連「七絶推敲表」について解説した蔦 清昭氏と五嶋美代子氏、構成吟のトリを吟じた横山龍精宗嗣（辻　寛子氏）がそれぞれ行った。

テーブルを越えての交流が行われた

懇親会場に入る前に、横浜媽祖廟にある故石川忠久先生の四言詩詩碑を見学した人もいたが、その詩を岳精会宗家である横山精真氏が即興で吟詠するなどで、盛り上がり参加者は時間を忘れるほど充実して楽しい懇親会となった。



吟詠する横山精真宗家

第三．吟行会（三溪園）

翌二十七日（日）の十時から、横浜市中区本牧にある国指定名勝の「三溪園」で吟行会が行われ、四十七名が参加した。

三溪園は、明治末から大正にかけて製糸・生糸貿易で財をなした横浜の実業家・原三溪が横浜の東京湾に面した三之谷に造り上げた日本庭園で、広さは五万三千坪。当日は心配したお天気も問題なく、普段はお世話になることのない園内ガイドの説明を得て、内苑、外苑、臨春閣などに京都や鎌倉から移築された多くの歴史的建造物を見学した後、展示施設である「三溪記念館」で、若き芸術家の支援や大震災後の横浜の復興など多方面に尽力した原三溪の業績やゆかりの資料、書画などの美術品を鑑賞した。

三重塔・大池をバックに記念撮影

昼食は、皆一緒に外苑にある「待春軒」で名物の「三溪そば」をいただいた。

その後は午後の部の講演会。

場所は、重要文化財で京都から移築された「旧燈明寺本堂」を貸し切って、関東学院大学国際文化学部長で教授の鄧捷先生による「原三溪の文人趣味・『出世』志向と三溪園」（注：「出世」は、立身出世ではなく、世から出ていく、俗塵を出るの意）の講演を皆で約一時間拝承した後に、質疑応答をした。

講演する鄧捷先生

講演の内容は、

一．実業家と文化人としての原三溪の経歴、

二．原三溪の漢詩和歌集「三溪集」の説明、

三．三溪の文人趣味と三溪園、

四．「出世」の志向と調和の精神が宿る三溪園、

五．三溪の生き様を包み込む三溪園

で構成され、原三溪の文人としての趣味趣向、本人作の八首の漢詩を通じて、七十年の生涯を解説していただいた。

歴史的な建造物である旧燈明寺本堂の中は静寂そのもので、皆が鄧教授のお話に聞き入っていた。

講演の内容は、神漢連のＨＰにYouTubeとしてアップされています。

終了後に、三溪園から横浜駅などへの帰路は、当日開催されていた横浜市民マラソンの影響で交通混雑があり、バスを乗り換えたりしたが、皆さん無事に目的地までたどり着くことができた。

静寂な本堂の中で鄧捷先生を囲んで

第四．最後に

こうして、令和六年度全日本漢詩大会神奈川大会は総ての行事を盛況のうちに無事終えることができた。二十六日は、準備のために朝九時から五十名近くの担当者が会場に来て諸準備、会場との打合せ、会場・壇上の設営、リハーサルを行うなどから始まったが、大会を終え、夜の懇親会、翌日の吟行会終了まで神漢連会員の皆さまのご尽力、ご協力でスムースな運営ができた。ここに深甚な感謝を申しあげたい。

（まとめ　東島正樹）

全日本漢詩大会　神奈川大会
神漢連会員の入賞作品

神奈川県知事賞

柳津送別　　白石信隆

同袍歸老向天涯　同袍帰老して　天涯に向かう
楊柳津頭共酒巵　楊柳の津頭　酒巵（しゅし）を共にす
鶴髪固知難再會　鶴髪　固より知る　再びは会い難きを
登舟解纜故遲遲　舟に登りて纜を解くこと　故に遅遅たり

神奈川県知事賞を受賞して

詩作を始めて七年、大きな賞をいただき感激しております。特に神奈川大会で、神奈川県知事賞をいただけたのは、県民として大変にラッキーな事でした。初心者講習から手を取る様に教えて下さった神漢連の諸先生・諸先輩には特に感謝申しあげたいと思います。

この詩は、通っている教室の課題詩として以前に作った時代劇です。交通事情や治安状況こそ全く異なりますが、港などで繰り広げられる、今に通ずる情景や離別の悲哀を何とか表現したいと思いました。

詩作を始めて間もないころ、結句で安易に喜怒哀楽などの直接表現を使い、厳しく注意されたことがありました。その折「物をして語らしめよ」と教えられ、肝に銘じています。この作品では、何年か前の「物（事）＝エピソード」を思い出し、結句下3字としました。

信州に住んでいた祖母が高齢になり、父母が引き取る事になったので、私が迎えに行きました。近所に住む長年の友人との別れは格別辛かったようで、時間が来ても、ぐずぐずして、車に乗りこもうとせず、「もう会えないわね」と互いに繰り返していました。

神奈川県教育委員会教育長賞

氷川丸　　小島数子

鷗鳥舞風金港天　鷗鳥　風に舞う　金港の天
碧波蕩漾岸堤邊　碧波　蕩漾する　岸堤の辺
百般航海渾如夢　百般の航海　渾て夢の如し
端麗孤高繫纜船　端麗　孤高たる　纜を繫ぐの船

漢詩を作る力を高めたい

漢詩の本を読み、漢詩の作り方を知りたいと思いました。学び始めてからまだあまり年月が経っていないので、漢詩を作っているときは、練習をしているような気持ちです。

氷川丸が舳先をこちらへ向けて繫留されている横浜港の空や海を、どう表現すればいいのか考えました。鷗や波に関する言葉を、三十年間、様々な航海をした歴史を持ち、留まっている船に、ふさわしいものにしたいと思いました。

空を悠然と舞っていた鷗たちがやがて、繫留船であることを教えるように、太い鎖の上に並んで止まるのを見て、繫留されてから六十四年が経つ今の鷗たちは、何代目の鷗たちになるのだろうかと思いました。また、船の上に高いビルを載せたように造られている現代の客船とは違う、落ち着いた美しさのある氷川丸は、横浜港に重みを与えていると感じました。

この度は賞をいただき、ありがとうございました。神奈川県漢詩連盟の先生方のご指導の賜物です。漢詩を学ぶことに一層努力したいと思います。

横浜中華街発展会協同組合賞

灣上月明　　高橋純子

風拂輕煙秋水閑　風は軽煙を払いて　秋水閑なり
玉輪涵影小溪灣　玉輪　影を涵す　小渓の湾
三更依約桂香裏　三更　依約たる桂香の裏
一棹扁舟貫月還　一棹の扁舟　月を貫いて還る

隠者の気分で

「港」にかかわるものとは何だろうと考えてみた。悩んでいた時、ふと頭の中に舟に乗る自分の姿が浮かんだ。そうだ、私は舟を漕ぐのが上手いのだ。

幼い頃から何度も見る夢がある。一人小さな舟に立ち、櫓をギーコギーコと漕いでいる。行く当てもなく水の上を進んでゆくのである。漢詩を学び始めて漁夫は隠者であると知った。何事にも縛られず心の赴くままに舟を操る。これは夢の中の自分と同じなのではないか。

そこで、秋の夜に月と金木犀をプラスして夢に漕ぎ出してみた。夜霧の晴れた小さな湾。そこにあるのは私の舟だけだ。寝転がって空を眺めるとまんまるの月。ふうわりと漂う甘い香りに誘われて、水面の月を舟でツイっと真っ二つ。今宵はどこまで行こうかな。

この詩を組み立てている間、空想上の湾に何度も舟を浮かべた。そこはあまりに美しい世界で作詩の苦しさを忘れさせてくれた。神奈川大会という記念すべき大会で賞をいただけたことは感慨深く、とても嬉しい。しかし、作詩が楽しかったのは想像の舟の上だけ。今はまた宿題の詩に頭を悩ます日々である。

神奈川新聞社賞

横濱港雑詠　　松本祐輔

漁家數點碧波頭　漁家数点　碧波の頭
晒網汀沙繫釣舟　網を汀沙に晒して釣舟を繫ぐ
今看繁華桑海變　今看る繁華　桑海の変
摩天大廈幾層樓　天を摩す大廈　幾層の楼

作詩の苦労と作品への思い

この度の地元横浜で開催された神奈川大会にて「神奈川新聞社賞」に入賞し、須藤社長から直接賞を授与され感激しております。偏に神奈川漢詩連盟の諸先生及び九詩期会の皆さまのお蔭と改めて感謝申し上げます。

当初の作詩は「横浜港感懐」とし、横浜港が現在、世界有数の貿易港であり、外国船が数多く往来し、日本経済の発展に大きく寄与し繁栄した姿等としましたが、観念的との指摘を受けました。そこで、発想を変えて新たに「横浜市歌」にヒントを得て、この横浜港も曾ては、とま屋の煙りの漁村に過ぎず、現在の繁華に激変した驚きを対比させることにしました。

しかし、どの様に表現すべきか、詩語の選択に心を砕き、師のアドバイスを受けて完成しました。

作品への思いですが、海なし県で育った私は海への憧れが強く結婚を期に三浦の海辺に居を構えました。当時は、春には田んぼに蛙が鳴き、秋には黄金色の稲穂が垂れ、浜辺には漁師さんが網を晒し船が繫がれて漁業が盛んでしたが、現在は景観が一変しています。このような桑田碧海が「横浜港雑詠」の作品の根底にあったと思います。

秀作

小港閑題　　岡嶋宣昭

雨餘漫歩蓼花磯　雨余　漫ろに歩く　蓼花の磯
何寺鐘聲渡夕霏　何れの寺の鐘声か　夕霏（せきひ）を渡る
小港無人唯寂寞　小港　人無く　唯だ寂寞たり
纔看一葉釣舟歸　纔かに看る　一葉の釣舟帰るを

入選

寄金港楠樹　　青山正子

煙波細雨泛輕鷗　煙波　細雨　軽鷗　泛ぶ
汽笛洋洋古渡頭　汽笛　洋洋たり　古渡の頭
楠樹亭亭一青蓋　楠樹　亭亭　一青蓋
送迎獨管不曾休　送迎　独り管して曾て休まず

銚子港即事　　石川昌良

銚津寂寞浪花平　銚津　寂寞として浪花　平らかなり
停泊漁船語笑聲　停泊す漁船　語笑の声
海上羣鷗遠飛去　海上の群鷗　遠く飛び去り
斜陽縹渺暮潮生　斜陽　縹渺として　暮潮　生ず

横灣晩景　　田内　隆

紅白薔薇立夕曛　紅白の薔薇　夕曛に立ち
清香滿院絶塵氛　清香院に満ちて塵氛を絶す
埠頭霄漢有精彩　埠頭の霄漢（しょうかん）　精彩有り
花色染天生紫雲　花色　天を染めて　紫雲を生ず

金港送人　　福田忠夫

天空索道景悠悠　天空の索道　景　悠悠たり
大舶乘風發渡頭　大舶　風に乗じて渡頭を発つ
折柳行人千里去　柳を折りて　行人　千里　去る
海螺一響遣春愁　海螺（かいら）　一響　春愁を遣る

オンライン吟行会

「長安」（八月二十二日開催）

今回の吟行地は初めての海外、悠久の歴史を持つ都「長安」です。都市を俯瞰して、あまたある遺産、または詩人など題材には事欠きません。YouTubeも数多く用意されました。

投句は二四不同・二六対のルールに則ったもの。課題韻字二字のどちらかを使った七言一句（白文と書き下し）をメールで送信。グループごとに選者により優句・秀句の選定、参加者による人気句の投票。一句ごとに作者のコメント後、選者の先生から講評あり。と、以上がオンライン吟行会の流れです。

同じ課題から様々な角度で切り取られる句の面白さ、使ったことのない韻字に格闘する時間、普段なかなか会うことのできない会員の方々との交流などが、オンライン吟行会の醍醐味です。また今回は、仕事や観光で長安（現・西安）へお出かけになった方が多く、楽しいお話も伺うことができました。次回は令和七年二月二十四日（月）に開催。見学も大歓迎です。皆さんのご参加をお待ちしております。（高橋純子）

晁卿太白喜身全

金澤雅義

「詩の中では本名を使いません。太白が良いでしょう。」と、香取会長からのご指摘。もとより、李白先生を呼び捨てる意思など全くありません。直しました。

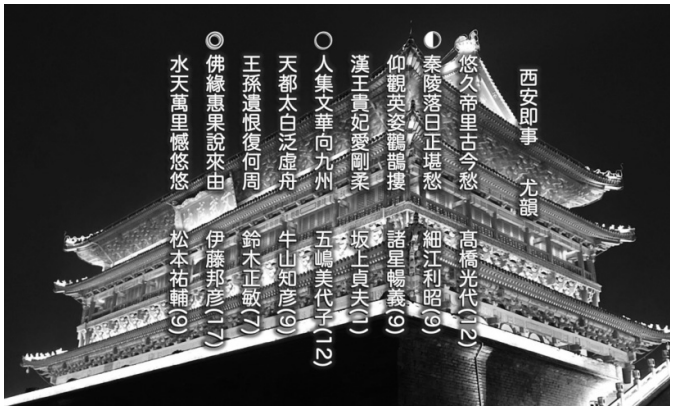
今回のリモート吟行会は、吟行地「唐代の長安」が課題。蔦さんから連絡されてきた指定韻字（コンピューター乱数処理との由）は、今まで見た事も使った事もない「田」と「全」。なんとも恨めしい。

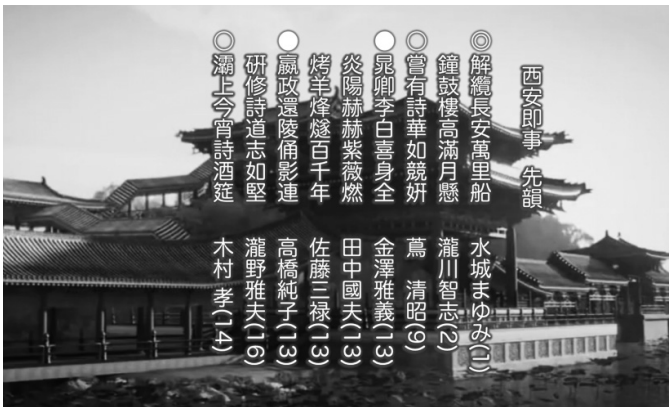
李白が玄宗皇帝に仕えたのは天宝元年からわずか二年。朝廷を去って十年後の李白は、遭難した阿倍仲麻呂を哭した詩〝哭晁卿衡〟の中で、「明月不帰沈碧海」と詠んでいます。李白と仲麻呂の関係は、単なる友人の域を超えていたと思われます。

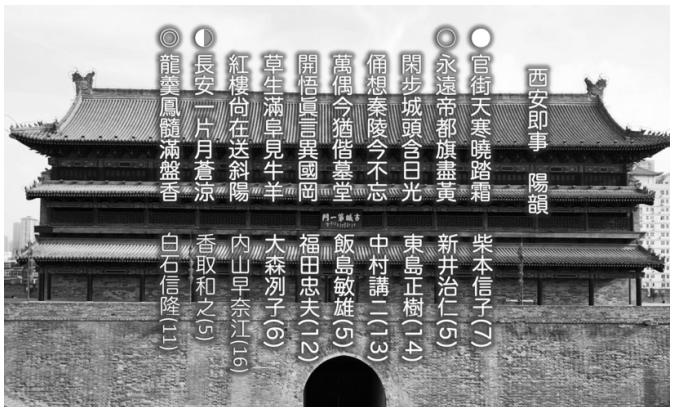
〝漢詩創作のための詩語集〟では、喜身全を「元気であることを喜ぶ」とあります。

帝都長安での日常生活、二人は会って「お前元気か？」など、家族の様に会話していたのではないでしょうか。

千三百年前の帝都長安。映画の一シーンのような場面を髣髴とさせてくれます。







漢詩講演会

『蘇州の歴史と漢詩ー西施のいたころー』

令和六年度
全日本漢詩大会神奈川大会　記念講演
全日本漢詩連盟　鷲野 正明会長

令和六年十月二十六日 土曜日、横浜市西区の「はまぎんホール ヴィアマーレ」において、全日本漢詩連盟 鷲野正明会長による『蘇州の歴史と漢詩ー西施のいたころー』の講演会が開催されました。秋天好日凡そ三百五十名の来場者で大盛会となりました。（四面参照）

鷲野正明先生

一、蘇州と西施（西子）

西施については、実はよく分からない。中国の歴史書、例えば春秋とか左伝、史記には記述がありませんが、呉越春秋には登場する中国四大美女の一人です。「西施捧心」、「顰蹙」、「顰に倣う」など何気なく使う西施から出た言葉もあります。西施が生きていた時代、呉と越はいつも戦っていました。その越王句践が会稽山に追い詰められた時、呉王夫差へ送られた美女の一人が西施です。「臥薪嘗胆」「会稽の恥を雪ぐ」などの言葉も生まれました。戦争に明け暮れる殺伐とした時代に彩りを添えて、歴史が俄然と面白くなります。

西施（西子）とは

二、漢詩

蘇臺覽古　　盛唐 李白

舊苑荒臺楊柳新　　旧苑 荒台 楊柳新たなり
菱歌清唱不勝春　　菱歌 清唱 春に勝へず
只今惟有西江月　　只今惟だ西江の月のみ有って
曾照呉王宮裏人　　曾て照らす 呉王宮裏の人

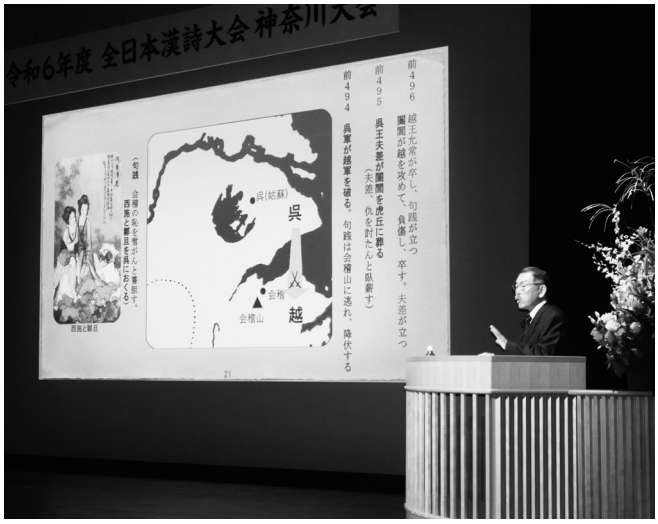
結句の呉王宮裏の人が西施の事です。蘇臺は蘇州の公園です。もうすっかり荒れてしまった。ところが柳の枝は春になってまた新たに青々とした芽を萌えだしている。呉越の興亡を知らない娘さんたちは、菱取りの歌を楽しそうに清らかな声で歌っているのでしょう。李白は悲しい歴史を知っていますから、春にたえずという詠い方をするわけです。昔華やかな西施を照らした月が今はすっかりさびれた姑蘇臺を照らしている。栄枯盛衰の悲しみです。柳は懐古の詩によく出てきます。

呉城覽古　　中唐 陳羽

呉王舊國水煙空　　呉王の旧国 水煙空し
香徑無人蘭葉紅　　香径人無く 蘭葉紅なり
春色似憐歌舞地　　春色 歌舞の地を憐むに似て
年年先開館娃宮　　年年先づ開く 館娃宮

香径と館娃宮が出ていますね。ですから霊巌山という事になります。呉王がいた昔の国は今すっかり落ちぶれて、水煙が煙っている。春色が歌舞の地を憐れんでいるようだ。擬人化して真っ先に館娃宮に花を咲かせるの

だと結びます。この土地に立てば栄枯盛衰の悲しみが湧いてくるでしょう。それをぐっと抑えて春景色に託して詠う。前半の起句は色のない風景、承句には香径が出てきて人はいないけれど葉っぱは色づいて、ここで色が出てきます。かつてここを西施が通ったわけです。そういったことを思い出させるという感じになります。転句結句は擬人化して詠うという詠い方です。



靈巖寺　晩唐　趙嘏

館娃宮畔千年寺
水闊雲多客到稀
聞説春來倍惆悵
百花深處一僧歸

靈巖寺

館娃宮畔　千年の寺
水闊く雲多くして客の到ること稀なり
聞説らく　春来　倍ます惆悵たりと
百花深き処　一僧帰る

どういう風景が見えますか。詩を読むときは風景を思い浮かべるのが大事。色を思い浮かべるとより分かります。花が沢山咲いて幻影が出てくるような感じ、西施が楽しく遊んでいるようなそういう風景が見えてきます。それがふっと消されてお坊さんがとぼとぼ帰っていくというそういう状況です。何でもないような表現ですが、いいですね。

館娃宮　晩唐　皮日休

艶骨已成蘭麝土
宮牆依舊壓層崕
弩臺雨壞逢金鏃
香徑泥銷露玉釵
硯沼祇留山鳥浴
屧廊空信野花埋
姑蘇麋鹿眞閑事
須爲當時一愴懷

館娃宮

艶骨已に蘭麝の土と成り
宮牆　旧に依りて層崕を圧す
弩台雨に壊れて金鏃に逢ひ
香径　泥に銷えて玉釵を露す
硯沼祇だ山鳥の浴するを留め
屧廊空しく野花の埋むるに信す
姑蘇の麋鹿真に閑事
須らく当時の為に一たび懐を愴しむべし

艶骨とは西施を言っています。西施が亡くなって蘭麝（らんじゃ）の土になってしまった。麝香のいい香りという事です。きれいな風景ですね。崩れた遺跡の泥の中から金の鏃（やじり）や西施の時代の玉の簪が出ると言い、湖にはただ鳥たちが水浴びをしにやってくるだけ。屧廊（しょうろう）とは響屧廊という廊下で、西施が鈴をつけて歩きますといい音が響くそうです。その響屧廊も野の花たちが埋めるに任せて、鹿たちが遊ぶ場所になってしまった。だからここに来たら当時の事を思いながら、心を痛ましむべきだと言って結びます。前半はとても綺麗な言葉使いです。そして後半は寂しさを詠います。

熱心に聴く多数の来場者

【終わりに】

YouTubeにてご講演の動画を配信しております。神奈川県漢詩連盟のホームページをご覧下さい。

記　伊藤邦彦

会員の活動

第二回自詠自書入門講座開催

（八月十一日・十七日）

令和五年度に初めて自詠自書入門講座を開催したところ、その卒業生（六名）が次年度の作品展に出品してくれました。この講座の必要性・効果を実感して、令和六年度も夏のお盆期間のお休みに開講し、漢詩入門講座受講者を含む若年サークル会員を中心に七名の参加がありました。

漢詩人の書は、書家目線でいうところの上手い字である必要はなく、自作漢詩の内容を訴える自分自身の思いのこもった字であればいいのではないでしょうか。

とはいっても、自分勝手に書けばいいというものではなく、漢詩作りにルールがあるように、書作にも伝統の作法があります。

初日には、知っておくべき作法や書道具について説明。その後、書道用具店で道具類の最低限の道具を揃えました。二日目には、作法を踏まえつつ手抜きをして漢詩を上手く書けるコツを説明しツールを提供して、実際に初めての作品作り。皆さん熱心に取り組み、会場は暫く静まり返りました。なお、毎回懇親会を設けて参加者の交流も図りました。

今年の「自詠自書の会作品展」の前には、昨年通りに錬成会日程を設けて、出品作品制作に取組む予定です。

（牛山知彦）

壱八会（いちやかい）活動開始

代表世話人　佐野輝美

第十八期は、昨年十月八日に第一回例会を開催し、無事に船出をいたしました。

例会開催前に会員十一名全員へサークル名を募り、決戦投票を含め二回の投票により「壱八会」のサークル名が決定しました。第一回の例会開催日も十月八日なので本会は「一と八」に縁深いものと感じられます。

例会は偶数月の第二火曜日にかながわ労働プラザで開かれます。講師の先生二名（松井講師、木村講師）を含め十三人で和気あいあいに満ちた集まりとなっています。漢詩初心者の私が代表世話人として纏めていけるのか未だ不安もありますが、会員の仲間に助けていただき何とか努めております。漢詩を楽しむ、二～三年後に資料を用いて漢詩を作れるようになるという当初の目標を忘れずに会の運営に関わって行きたいと思います。

会の発足に際し、木村講師からお祝の漢詩をいただきましたことも望外の喜びであります。ここに記念として記します。

十八期會始動　　木村　孝

有縁相會愛詩人　縁有りて　相ひ会す　詩を愛する人
此日鷗盟吟友新　此の日鷗盟　吟友新なり
共學瑤篇耽諷詠　共に　瑤篇を学び　諷詠に耽る
何時詞藻動梁塵　何れの時にか　詞藻梁塵を動かさん

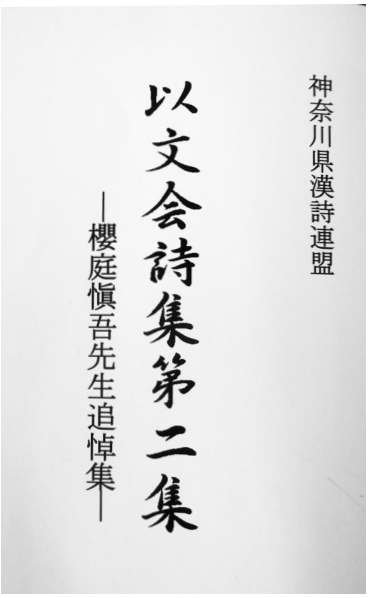
詩集発刊

以文会　大森冽子

一般には区切りの節目に出すようだが、思いがけない不幸と共にサークルの存続が吃緊に迫り、発刊することになった。費用削減のため、印刷会社は使えず、印刷前段までは自ら編集をすませ印刷のみ格安サイトを使うことになったのだが、誰も手を挙げず、不安ながら担当することになった。案の定、頁の数え方から紙質まで挫折の連続。なんとか先生の一周忌に無事奥様にお届けすることができた。若い期の多才な会員なら容易にできたことでしょう。立派なものを目指せずとも出来る範囲精いっぱいの詩集発行となった。

詩集発刊で言えるのは他人任せにせず全員が協力すること。特に校正は大切です。

詩集は好文会、九詩期会が五年、十年の節目に発刊しています。以文会は特殊な事情により発刊しました。各期も状況が許されるのであれば作詩の成果を見る詩集を出すのもモチベーションの一つではないかと考えます。



会員のたより

漢詩は現代中国人に求められる文化人の素養

逸語会　松田奈月

中国で生活していると、普段からスピーチやドラマなどで漢詩のフレーズが引用されているのをよく耳にします。小中学校の国語の教科書に出てくる古詩は三百首以上あり、意味を理解し暗唱することが推奨されています。孟浩然「春暁」や、李白「静夜思」などは小学校一年生で最初に学ぶのだとか。

二〇一六年から『中国詩詞大会』という番組が国営の中央テレビで放送されているのですが、漢詩に関するあの手この手のクイズがなかなか面白く。「数字と酒器が入っている詩」のお題でいくつ暗唱できるか競ったり、「中国ラオス鉄道の新開通を祝福するのに適切だと思う詩を挙げよ」（小学生が陸遊の「遊山西村」と答えていました）など。第三回大会ではバイク配達員のおじさんが、北京大学の院卒生を圧倒的な知識量で破り優勝。つらい仕事の後に、毎晩「唐詩三百首」を一首ずつ暗記するのが生きがいだったと語るなかなか胸アツなフィナーレでした。学歴重視の中国ですが、漢詩の知識量と理解の深さは文化人として尊敬されるのだなあと改めて。

今の中国の漢詩事情などをまた少しずつお届けできたらと思います。　（次回より連載）

何時でも学べる

志詩会　三塚昌子

「はるはあけぼのやうやうしろくなりゆくやまぎはすこしあかりて」等と諳んじていた女学生が人生の終焉近くになって、起承転結、白丸黒丸、韻は等と、五十年近く本棚の横に立てかけられていた角川書店の蔵書版、昭和四十八年発行の新字源をパタンパタンと捲っている。入門講座に出席時の先生が「八十六歳の方が居られます」と言われたが、いや私はその上ですとは言えずに時が過ぎる。

十月の例会が終わり、友人と別れバスを待つ時刻表を見ると二十分待ち、いろいろ考えたが、あえて急ぐ事もなし、待つことに。バス停の前にはラウド型の腰掛があり、拝借。立ってバスを待つ人、道路を歩く人の足の運び、靴等を眺める。結構楽しい。空はだんだんと茜色に染まっていく。バスの時間は五時七分「もう少しだ」その時、開港記念会館の赤い塔にあるあの大きな時計が鳴り出した。「五時」。塔の時計が時を告げるとは夢にも思っていなかった。感無量、漢詩の勉強をしていなかったら、恐らくこの時間にこの場所にいることはなかったろうと思う、と共に会に誘って下さった方に感謝。

今晩は今回の皆様の詩をゆっくりと眺める事にしよう、と先生の添削と批評を思い出しながら、そうして又パタンパタンと辞書を繰る。次の詩題に想いをはせながら。大変だけど幸せな時。

「漢詩のなぞなぞ増補第二版」

九詩期会　山口幸雄

漢詩や中国故事を題材にしたなぞなぞ集の増補第二版を作りました。全三十問あります。

基本は「白居易が相撲を取ってハッキョーイ残った」「歩いて帰ったのは杜甫だ」といった他愛もないダジャレですが、作者としてはそれなりに苦労をしています。

まず題材がそれなりにポピュラーであること。馴染みのない詩人や詩句では、ダジャレもなかなか受けることはできません。

ダジャレを思いついたら、それをもっともらしいストーリーにまとめるのも苦労します。

「煽情香水帯」というダジャレを思いついたときには、楊貴妃に無理矢理こじつけました。

それから文章も簡潔に、落ちがはっきりわかるように書かなければなりません。

今回は画像生成ＡＩに挿絵も描いてもらいました。時代考証はでたらめですが、なかなか面白い絵ができました、

もとはＡ六判の手作りですが、今回ＰＤＦ版を、神漢連図書館に入れていただきましたので、どうか皆さんネットでご笑覧ください。

漢詩大会で神漢連会員活躍

第十六回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞諸橋轍次賞

高橋純子

牡丹　　牡丹

庭樹陰濃掩翠苔　庭樹　陰濃かにして　翠苔を掩ひ
春光欲盡牡丹開　春光尽きんと欲して　牡丹開く
紅妝麗豔馨香遍　紅妝（こうしょう）　麗艶　馨香遍し
宛似太眞含笑來　宛（あたか）も似たり　太真の笑ひを含みて來たるに

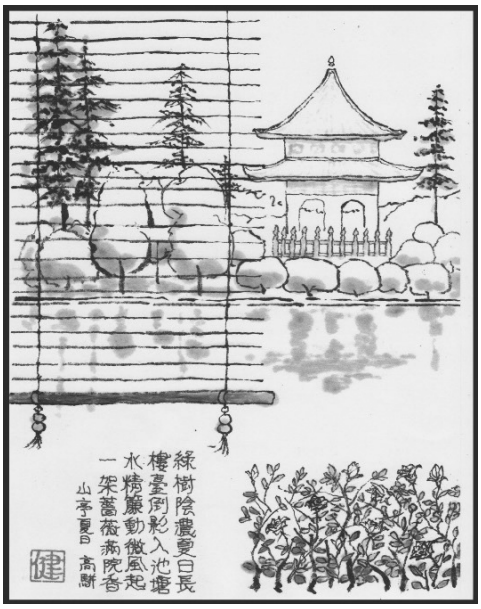
牡丹の花に魅せられて

昨年の一月、鎌倉の鶴岡八幡宮に牡丹の花を観に出かけた。牡丹を賞でるのは初めてだった。というのも、牡丹はあまりに華麗なイメージで、野の小さな花が好きな私にはかなり縁遠い花だったから。

園に入ると紫・淡紅・白の牡丹が重たそうな花をもたげている。本当にあでやかな花だ。人々を魅了するのも良く分かる。この花が開くとあたりがぱっと明るくなるだろう。一つひとつの花に向き合ってみると薄い花びらを幾重にも重ねた大輪の花が、冷たい風にふるふると揺れている。はかなげながらも、牡丹の花にしか醸し出すことのできない艶やかな雰囲気が強く印象に残った。

この詩は李白の「清平調詞　三首」をもとにしている。あまりにも有名な詩だが、神漢連の講演会で鷲野先生が取り上げて下さり、もう一度見直しをした。風に揺れていた花びらを楊貴妃の薄絹の着物になぞらえた。きっと楊貴妃がその場に来ると、この花が咲いた時のような煌びやかな空気をまとうのだろう。

「牡丹を観に行こう。」と友人が声をかけてくれなければこの詩は生まれなかった。ランチを口実に腰の重い私を誘い出してくれた友人に感謝である。



優秀賞

東郊覓詩

春老行迷山下村
堂前桃李落花翻
雞鳴桑樹知何處
日夕將敲五柳門

東郊に詩を覓む

春老いて行き迷ふ山下の村
堂前の桃李　落花翻る
鶏　桑樹に鳴くに　知んぬ何れの処ぞ
日夕　将に敲かんとす　五柳の門

木村　孝

新秋夜坐

半宵雨歇早涼生
閒坐螢窗風轉清
燈火炯然書可把
梧桐一葉已秋聲

新秋夜坐

半宵　雨　歇（や）みて　早涼生ず
蛍窓に閑坐すれば　風　転た清し
灯火　炯然　書　把る可し
梧桐　一葉　已に秋声

宇野次郎

佳作

首夏平明

夢破啼鵑曉色青
西方天際見疎星
泠泠零露濕荷葉
嫋嫋香風透曲櫺

首夏平明

夢　啼鵑（ていけん）に破れて暁色青し
西方の天際　疎星を見る
泠泠たる零露　荷葉を湿し
嫋嫋たる香風　曲櫺（きょくれい）に透る

木村　孝

古寺池蓮

院裏池塘見眼前
瑤華稠疊正鮮妍
亭亭淨植如君子
仙梵時聞更晏然

古寺の池蓮

院裏の池塘　眼前に見る
瑤華稠疊（ちゅうじょう）　正に鮮妍
亭亭として淨く植（た）つこと君子の如し
仙梵　時に聞きて更に晏然たり

牛山知彦

第九回漱石記念漢詩大会

優秀賞

五嶋美代子

街巷明月
日暮陰涔十二街
秋來霜露濕芒鞋
月光不啻照歸路
掃破劬勞慰客懷

街巷明月
日暮れて陰涔十二街
秋来たりて霜露芒鞋を湿らす
月光啻に帰路を照らすのみにあらず
劬労を掃破して客懷を慰む

佳作

杉森千枝美

都下寓居
當年負笈上京華
一室雨餘時有蝸
遙望樓臺如櫛比
寓居偏喜遠粉譁

都下寓居
当年笈を負いて京華に上る
一室雨余時に蝸有り
遥かに望む楼台櫛比の如し
寓居偏に喜ぶ粉譁に遠きを

入選

柴本信子

夏雲
夏雲千變自南來
閃閃電光響迅雷
驟雨轟然檐滴烈
旱天慈雨絶炎埃

夏雲
夏雲千変南より来る
閃閃たる電光迅雷響く
驟雨轟然として檐滴烈し
旱天の慈雨炎埃を絶つ

■神奈川県漢詩連盟の会員　山本大作様は、令和六年三月二十三日に逝去されました。（享年八十八）
ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

令和六年度特別史跡旧閑谷学校釈菜

最優秀賞

小嶋明紀子

閑谷庠舍
高甍巨桷總嚴然
講誦詩書經幾年
一境何由多福德
藩侯英邁庶民賢

閑谷庠舍
高甍巨桷總て嚴然たり
詩書を講誦して幾年をか經たる
一境何に由りてか福德多き
藩侯は英邁にして庶民は賢なり

閑谷学校の釈菜の儀に参列して

閑谷学校の釈菜に於きまして、拙作「閑谷庠舍」に最優秀賞の栄誉を賜り光栄に存じます。釈菜の儀式に献詩者として参列しました。孔子を祭る大成殿にて厳粛に儀式が行われる様は胸に迫るものでした。分胙の儀という名の昼食会に於いて献詩者という立場でスピーチし「故・石川忠久先生のご遺志を継いで漢詩実作、漢詩漢文教育を振興させます。わたくしが主宰を務める大人向けの会の参加者のうち、三名の方も受賞しました。若年者指導も長年行い、高校教員で生徒に漢詩実作を指導している人達でネットワークを作っています」と発言しました。ＮＨＫ岡山放送局の方が「釈菜」を取材して下さいました。このニュースは「https://www3.nhk.or.jp/lnews/okayama/20241026/4020021725.html」で御覧になれます。わたくしが主宰を務める漢詩創作研究会にご興味の有る方はご一報ください。横浜で開催していますが、通信でも参加できます。電話０９０－６１００－３３９０

入賞

高橋純子

閑谷黌釋菜
亭亭楷樹石階邊
廟宇朱甍映碧天
嚴肅典儀清韻裏
啓龕跪拜敬文宣

閑谷黌釋菜
亭亭たる楷樹石階の辺
廟宇の朱甍碧天に映ず
嚴肅たる典儀清韻の裏
龕を啓いて跪拜し文宣を敬う

神奈川県漢詩連盟 令和七年の行事予定

カレンダーに予定を記入しましょう

●漢詩入門講座

漢詩の鑑賞と実作（全五回の講義と実習、第十九期生）
漢詩に関心のあるお知り合いに声をかけ、推薦してください）

期日・時間　①四月二日（水）　②四月九日（水）　③四月十六日（水）
④四月二十三日（水）　⑤五月十四日（水）午後一時三十分～四時

場　所　神奈川近代文学館

講　師　香取会長ほか　連盟の役員

問合せ・受講申込

〒221-0001　横浜市神奈川区西寺尾一―六―四　新井治仁
TEL/FAX 045-432-5438　Mail：haruhitoarai@hotmail.co.jp

●総会・講演会・懇親会

期　日　五月二十九日（木）

時　間　午後一時～四時三十分（総会・講演会）　五時～六時三十分（懇親会）

場　所　横浜市開港記念会館（横浜市中区本町一丁目六番地）

総会議題　令和六年度事業報告・決算報告、令和七年度活動計画・予算案ほか

講演会　鷲野正明先生　演題未定

参加申込　総会・講演会は申込不要。懇親会申込は四月初旬発送予定の開催案内に同封の振込用紙で振込んでください。

●オンライン吟行会

期　日　二月二十四日（月）　午後一時三十分～

開催日が近づいた頃メールアドレス保有者全員に参加可否の問合せをします。

編集後記

◇十月二十六日、はまぎんホールにおいて全日本漢詩大会神奈川大会が開催されました。多くの会員の皆様にご協力いただき無事に終了いたしました。お忙しい中大会に参加してくださった方々も、ありがとうございました。

◇翌日二十七日の横浜三溪園での吟行会も晴天に恵まれ、日本庭園を散策後、原三溪の漢詩について鄧捷先生の講演会がありました。

◇次回の全日本漢詩大会は徳島で開催されます。テーマは「果樹（花や果実等も含む）にかかわるもの」です。皆さん奮ってご応募下さい。

◇十五頁に掲載しました「旧閑谷学校釈菜献詩」は、昨年度より全日本漢詩連盟が全面的に協賛・支援、「釈菜」で孔子像に捧げる漢詩を全国から募集しました。今年度の募集要項が発表になりましたら会報でお知らせいたします。

◇第十八回漢詩入門講座を受講された「壱八会」の皆さんを新たに迎えました。鑑賞会・オンライン吟行会・研修会・自詠自書の会等へのご参加をお待ちしております。

◇初めての三溪園は、原三溪のこだわりが随所に感じられ素晴らしかったです。歴史的建造物と自然の調和や庭園も素晴らしく、松風閣からの眺めは前日の大会の疲れを忘れさせてくれました。また、季節ごとに違った景色を訪ねてみたいと思います。　（高橋純子）